The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ワークショップ 「異言語環境で日本の小説を読む」ー葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』のウルドゥー語の翻訳を通してー
Author(s)	محمّد معين الدين
Citation	多言語翻訳 : 葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』. 2013, p. 70-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61329
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

2015 年 2 月 13 日

ワークショップ「異言語環境で日本の小説を読む」

―　葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』のウルドゥー語の翻訳を通して―

モハンマド・モインウッディン

インドとパキスタンにおいて、直接日本語からウルドゥー語に翻訳された日本文学は非常に少ない。かりにウルドゥー語話者がウルドゥー語で日本文学を読む機会があっても、それはほぼ英語版からの重訳である。インド・パキスタンと日本との間には、文化的なギャップがあり、それが、日本文学の理解をより困難なものとしている。このような状況が現実に存在するため、発表者は、このプロジェクトは大変大きな意味があると感じており、積極的に翻訳できるよう、努力しているところである。

『セメント樽の中の手紙』の翻訳は、様々な難しさを伴うものであったが、とくにどのような表現を用いるか、また、日本の歴史的・文化的側面をウルドゥー語話者にどのように伝えるべきか、という点に、発表者はとくに頭を悩ませた。

まず、タイトルの〈樽〉そのものをウルドゥー語で伝えること自体が困難であった。実は当時のインド（現インドとパキスタン）では、通常セメントの容器に〈樽〉は使用されていなかったのである。日本では、1920 年代に樽から現在の袋へ移行したそうであるが、当時のイギリス植民地領であったインドでは、セメントはそれほど使用されていなかった。具体的に述べるならば、インドのセメントの歴史は 1889 年から始まり、1936 年に ACC（Associated Cement Companies Ltd.）というセメント協会が設立されている。本格的なセメント産業がインドにおいて隆盛を迎えるのは、この ACC の設立以降と言えよう。このような背景があるため、ウルドゥー語の読者は、すでにタイトルの段階で、この小説の理解に難しさを感じるのである。

このほかにも、インドと日本の間には昼食の時間や仕事中の服装、労働者の住まい、容積や通貨の単位など様々な文化的差異がある。そのため「丼」や「長屋」や「気象の確かりした」といった名詞や表現、また「セメン枡」における「枡」のような、歴史的・文化的背景を持つ用語を翻訳するのは非常に難しかった。また「恵那山」や「木曽川」といった日本の地名を代名詞として扱い、それらの詳細な説明は脚注に入れることにした。

発表者は、単に日本文学の紹介というだけでなく、日本の慣習や伝統文化をウルドゥー語話者に伝えることをも視野に入れつつ、この翻訳に取り組んできた。本作品は、一般にあまり伝えられない当時の時代状況、すなわち 20 世紀前半の日本の労働者が置かれた環境やその心情を外国人に伝えることができると考えている。この翻訳が、インドやパキスタンにおける日本文学研究に貢献できなるならば幸いである。